



TITLE:

精神分析における昇華理論の探求
—天才論から喪の作業へ—
(Digest_要約)

AUTHOR(S):

堀川, 聡司

CITATION:

堀川, 聡司. 精神分析における昇華理論の探求—天才論から喪の作業へ—. 京都大学, 2015, 博士(教育学)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k18737>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要約は
2015/07/01に公開

博士学位論文要旨

精神分析における昇華理論の探求
—天才論から喪の作業へ—

堀川 聡司

2015年

本研究は、精神分析における「昇華」(独:Sublimierung、英:sublimation、仏:sublimation)という用語の諸相を探究するものである。その目的は、臨床実践を考察する上で有用なものへとこの概念を提示し直すことにある。

昇華とは、精神分析の創始者 Freud, S.が作った「性的なエネルギー（リビドー）を本来の目標ではない、社会的・文化的に価値あるものに変換すること」を意味する造語である。Freud, S.本人が昇華そのものについて正面から取り上げることがなかったこともあり、この用語は歴史的に、概念としての複雑さや曖昧さが付きまどっていた。さらに、Freud, S.以後の精神分析の世界においても、「欲動」の視点が持たれることが少なくなるにしたがって、昇華という用語の重要性は、理論面においても、臨床面においても、減じる方向へと進んでいった。

しかしながら、昇華という概念には、人の「心の発達・成熟」という要素と、「現実生活での適応・外部からの評価」という要素の二つが交差しており、臨床実践を考える上で避けて通ることのできない問題が内包されている。というのも、心理臨床の実践において治療者、とりわけ力動的なオリエンテーションをもつ治療者は、常にクライアント／患者の内的な心の世界に大いなる関心を払う一方で、その人が社会・文化の中でどのように生きてゆくかという点にも目を向け続けなくてはならないからである。

本研究では、昇華という言葉に内在している曖昧な点や使用する者の間で生じている齟齬を整理し、理論面の考察をする作業（文献研究）と、心理療法の経験を昇華理論の視点から考察する作業（臨床実践研究）によって、問題に取り組みされた。

本研究の構成は、全体的な問題提起をする序章に始まり、第一部「昇華理論の展開」、第二部「昇華理論の批判的検討」、第三部「昇華理論の臨床的応用性」という三つのテーマで論を展開し、最終的に終章にてそれらを総括する形をとっている。

第一部「昇華理論の展開」は、精神分析史における昇華理論がどのように展開し、その語られ方がどのように変容していったかを概観し、レビューすることを目指した。構成としては、Freud, S.の昇華理論を取り上げる第一章と、Freud, S.以後の昇華理論を取り上げる第二章から成っている。

第一章「フロイトの昇華理論」では、まず「時代別レビュー」として、「昇華」という用語の語源を振り返った上で、Freud, S.の理論展開に応じた昇華理論の展開を描写した。この際、Freud, S.の欲動論の変遷が重要な因子となっていることを踏まえ、Freud, S.の昇華理論を1920年を境に、第一欲動論に準拠した「フロイト前期モデル」と第二欲動論に準拠した「フロイト後期モデル」の二つに識別した。

続いて、「テーマ別レビュー」として、Freud, S.が著作の中で昇華という用語を用いる際の主題や文脈を抽出し、それぞれの特徴を描写した。とりあげた主題には、「崇高で希少なもの」、「欲動のその他の運命との関連」、「治療論」、「文化論」、「攻撃性の昇華」の五つがあった。これらのレビューを通して、Freud, S.の昇華理論には概して(i)脱性化と(ii)社会化の二要素が存在することが明らかになった。さらに、Freud, S.における昇華理論がなにゆえ複雑で曖昧なものとなっているかを探索し、第二章にて見てゆく精神分析家たちの昇華理論とFreud, S.のそれとを比較するための下準備を整えた。

第二章「フロイト以後の昇華理論」では、Freud, S.以後の昇華理論の展開を〔1〕自我心理学、〔2〕対象関係論、〔3〕フランス精神分析、という三つの大きな流れに注目し、それぞれの概観・レビューを行った。〔1〕自我心理学においては、Freud, A.、Fenichel, O.、Hartmann, H.らについて取り上げ、昇華理論も自我の自律性を強調する方面へとその重点が移っていった流れを確認した。そして昨今興隆しつつある、関係学派や自己心理学において、昇華という用語はほとんど使われなくなったことを指摘した。〔2〕対象関係論においては、主に Klein, M.の著作群を概観し、昇華と関連深い「償い」という概念が提示されるまでの足跡を辿った。しかし Klein, M.以降の対象関係論においては、昇華という用語は償いにとって代わり（Segal, H.を除いて）ほとんど言及されなくなってしまったことも示された。〔3〕フランス精神分析においては、Lacan, J.、Laplanche, J.、Chasseguet-Smirgel, J.、Dolto, F.らに取り上げられ、各々の精神分析家が試みた Freud, S.の文献読解のありようや独自の昇華理論を要約した。概して、フランスの精神分析においては、英米の精神分析とは異なり、欲動の概念が捨てられることもなかったため、昇華理論の研究も盛んであった。最後に、各々の昇華理論が、二つの時期に分けられる Freud, S.の昇華理論（フロイト前期モデルとフロイト後期モデル）のうち、どちらにより準拠しているのかを指摘した。

第二部「昇華理論の批判的検討」は、昇華理論に内在している理論的な矛盾点、曖昧な点について検討し、精査すること、さらには今日的な観点からみて妥当かつ有益な昇華の定義を示すことを目的とした。構成としては、第三章「昇華の動因論と価値論」と第四章「クラインの昇華理論再検討」の二つの章から成り立っている。

第三章「昇華の動因論と価値論」では、まず Laplanche, J.が昇華理論の問題点として指摘した二つの問題、すなわち昇華という心的メカニズムにおいて、「欲動が昇華という一つの運命を辿るのはどのようにしてか？」という問題（動因論）と「社会的・文化的に価値あるものを人が知り、それを目指すようになるのはどのようにしてか？」という問題（価値論）の二つについて考察した。そのために、動因論と価値論について語ったと考えられる Freud, S.、Nasio, J. D.、自我心理学派の諸分析家、Klein, M.、Chasseguet-Smirgel, J.、Dolto, F.らの昇華理論を取り上げ、理論的な整合性、さらには臨床的な応用性という二つの視点から精査した。結果、昇華の動因論には、〔あ〕自我の働き、〔い〕体験のひな型として償い、〔う〕去勢、の三つが挙げられた。また、昇華の価値論には、〔ア〕内的審級の形成、〔イ〕自我自律性の機能、〔ウ〕去勢、の三つが挙げられることを示した。これらの分類を踏まえて、自我自律性を主張する自我心理学の思考法は、本研究が目指す昇華理論の再構築には適さないこと、さらに、臨床的応用性が見込まれる二者心理学モデルを提示している昇華理論としては、Klein, M.の「償い」と Dolto, F.の「象徴産出的去勢」の二つの理論であることを示した。

第四章「クラインの昇華理論再検討」では、今日のクライン派精神分析において昇華理論はもはや「償い」にとって代わってしまい不要であるという見解に疑問符を投げかけ、「償い」だけに収まらない要素が、Klein, M.の語った昇華理論には存在していることを主張した。そのための素材として、Klein, M.が 1929 年の論考で取り上げた「症例ルース・クヤール」と、彼女の見解を示した。そして、それについて言及した Lacan, J.の読解、とりわけ〈物〉に関する議論を参照した。それらを踏まえ、Freud, S.が述べた昇華理論に内包さ

れていた二つの要素（脱性化・社会化）が、ここに至って三つの要素（代替満足・象徴化・<物>の再建）にまで射程が拡張されることを描き出した。こうした考察からは、昇華という概念には、「人間に運命づけられた原初的な満足の喪失が身体ベースで内在している」という事実が密接に関わっており、その点において、昇華が対象関係や内的空想の枠組みだけでは回収されえないことを強調した。

第三部「昇華理論の臨床的応用性」は先に提示した昇華理論の定義に基づき、この理論を持つことが、臨床実践にどのように寄与しうるのかを、筆者が経験した臨床素材をもとに検討した。第五章では、臨床ヴィネットを微細な視点から見てゆくことを通して、第六章では、心理療法過程を巨視的な視点で見てゆくことを通して、議論を進めた。

第五章「象徴産出的去勢の臨床実践」では、Dolto, F.が養育モデルとして唱えた（昇華をもたらす）「象徴産出的去勢」が、精神分析的な心理療法の治療技法へと置き換えられることを示した。Dolto, F.の言う象徴産出的去勢の要素を挙げるとするならば、(a) 一次的な欲動の満足を欲していることに対して理解を示す、(b) 一次的な欲動の満足を禁止する、(c) それとは異なる別の満足の手段を提示する、の三つに集約できる。それを踏まえ、筆者が経験した精神分析的な心理療法のヴィネットを検討した。そこから考察されたのは、上記の三つは、精神分析的な心理療法において、それぞれ、(A) クライエントの願望や気持ちを描写・解釈することで、それを理解している旨を示す、(B) 精神分析的な心理療法を成り立たせる内的・外的構造を維持する、(C) 更なる自由連想・自己表現が可能になる場を設える（そしてそれらを促す）、という三つに置き換えて理解できるということである。さらに、象徴産出的去勢は、昇華理論の二つの側面、代替満足と象徴化と密接に関わっていることを指摘した。

第六章「喪の作業としての昇華と偽りの昇華」では、先に提示した本論における昇華の定義に基づき、昇華とは似て非なる現象（偽りの昇華）を昇華から識別するための検討を行った。そのための素材として、筆者が経験した精神分析的な心理療法の事例が二つ提示され、それぞれについて昇華の視点から議論がなされた。

第一の症例において、クライエントはある時期を通過して、非常に社会的評価を得る状態へと変貌していった。しかし、この社会的な成功の背景には、クライエントの内的な成熟ではなく、むしろ強い羨望の防衛が存在していた。この事態は、治療経過によって触発された抑うつ不安を体験しないようにするためのアクティング・アウトであった限りにおいて、昇華とはみなすべきではないと主張した。この症例の場合、本来的には口唇期水準の問題が、男根期水準の課題によって克服している旨を指摘し、それを「男根期的再建」と命名した。

第二の症例においても、クライエントは心理療法の経過を通じて、適応的にかつ社会的に高く評価される状況へと変化していった。しかしそれは不安や心的苦痛を除去し、快感を維持する心的構造、対象関係に基づいた社会的成功であった。これは無意識的とはいえ、巧妙に成し遂げられたものであり、偽りの昇華に相当するものであった。クライエントは喪失を伴うエディプス的な現実を否認するために、倒錯的な心の在り方に留まっていた。さらに、このような対象関係はクライエントの外的な生活のみならず、治療関係においても治療者を巻き込んだ形で展開していた。このようなクライエントの在り方は、社会的に

は成功してはいるものの、自身の心の真実を見ようとはしていない点において、昇華と見なしえないと結論づけられた。このクライアントの場合、口唇期水準の課題である心の問題を、巧妙に他者を支配する倒錯的なあり方で乗り越えようとしていた。その限りにおいてそのようなあり方は、昇華の要素の一つである〈物〉の再建ではなく「肛門期的再建」と呼べるものであった。

本研究を締めくくる終章「天才論から喪の作業へ」では、Freud, S.が一部の天才を語るために使用された天才論としての昇華が、時代と共に失墜していった要因を、「理論的な必然性」と「Freud, S.の夢が引き継がれなかったこと」の二点に見出した。そして、代替満足、象徴化、〈物〉の再建という、三つの要素で構成される昇華理論を携えることが臨床実践において、どのように有益に寄与されるかを指摘した。そして最後に、昇華を一種の純粹形態として想定する本研究の態度を省察し、昇華理論の限界点とさらなる可能性について言及した。そして結論として、昇華とは、精神分析の営みの到達点を見直す一つの試金石となる旨を述べた。なぜならば、昇華理論はその性質上、理論が再構成され、検討し直された場合、そのシステムの一部だけが更新されるのではなく、システム体系全体が考慮されることになるような類の概念だからである。精神分析が何らかの絶対的な存在に依拠することをせず、絶えずそれを批判的に検討し直す営為であることを踏まえれば、昇華理論は、極めて精神的なものと言える。